

庭野平和財団 2009 年度活動助成

「スリランカ：紅茶園で働く人々の支援計画立案のための調査」報告書

特定非営利活動法人 パルシック

コード番号 09-A-063

1. 活動の目的

スリランカにおいて、紅茶園で働くタミル人労働者は、2003 年に初めて政府から国籍が付与される等、無権利状態に置かれている。その実態をより正確に認識し、改善のための方策を探るために、同国ウバ州のグリーンフィールド農園と近隣地域の紅茶園の労働者の生活条件、収入、労働条件、子供たちの教育状況などを調査する。

並行して団体として、紅茶の製法、その環境条件、労働条件について十分な知見を有していないので、日本国内で紅茶製造・スリランカ紅茶園に関する学習会を実施、加工や茶園の歴史に関する知見を蓄積し、スリランカの紅茶園での栽培、製造方法の改良、そしてそこで働く人々の生活改善のための支援策をもとめることを目的とする。

2. 研究活動の内容と方法

- 1) ウバ州における紅茶生産者の生活状況についての現地調査およびインタビュー：茶園労働者、マネジャーにインタビューをし、現状を調査する。
- 2) スリランカ茶園を取り巻く状況や紅茶の製法に関する学習会：紅茶の製法やスリランカ茶園の歴史に詳しい専門家を招き、学習会を開催する。
- 3) スリランカ紅茶園に関する、文献調査。

3. 活動の実施経過

- 1) 2009 年 8 月～2010 年 1 月 スリランカ紅茶・紅茶製法に関する学習会（国内 5 回）
- 2) 2010 年 12 月 19 日～25 日 スリランカ紅茶園実地調査
- 3) 2010 年 4 月 10 日～24 日 スリランカ紅茶園実地調査
- 4) 2010 年 6 月 20 日～7 月 10 日 スリランカ紅茶園実地調査
- 5) 通期 文献調査

4. 活動の成果

a. スリランカ紅茶の背景

① スリランカの紅茶産業の位置

19世紀初頭、スリランカの中央部高地地方の貧農はオランダ（1658-1796年当時のセイロンを植民地支配）によって導入されたコーヒーを家の周りで栽培して、補完的な収入としていた。オランダに代わって英国がスリランカの支配を掌握した（1796-1948年）

後になって、ゴム、ココナツと並んでコーヒー園のプランテーションが本格化

表1 スリランカの主な輸出品と輸出額の推移（単位100万ドル）

年	工業製品					農産物				宝石類	その他
	工業製品合計	織維製品	石油製品	ゴム製品	ダイアモンド	紅茶	ゴム	ココナツ	その他		
2000	4,283	2,543	68	172	166	700	29	121	155	93	141
2001	3,710	2,424	73	182	192	690	24	82	136	82	93
2002	3,631	2,576	65	231	216	660	27	84	168	86	45
2003	3,977	2,809	100	283	247	683	39	93	150	79	108
2004	4,506	2,895	131	394	265	739	51	113	162	109	77
2005	4,948	3,080	187	428	311	810	47	113	183	120	124
2006	5,383	3,340	169	482	349	881	93	124	194	119	87
2007	5,967	3,469	255	542	419	1,025	109	141	232	105	60

出所：スリランカ中央銀行

した。1820年代に英國植民地当局はキャンディ周辺の広大な土地を、コーヒー・プランテーション開拓のために英國人プランターたちに引き渡した。しかし、1869年から数年間にわたってコーヒーに固有のさび病が蔓延した結果、コーヒー農園は壊滅的打撃をこうむった。

そしてスリランカ高地のプランテーションは、今に見られるように紅茶生産を中心とするようになった。さび病の発生に先立つ1867年に「紅茶の父」と言われる英國人ジェームス・ティラーがキャンディ近郊に紅茶を植えたのがスリランカの紅茶エstateの始まりと言われている。1887年にはすでに紅茶はスリランカ（当時セイロン）の重要な輸出品となった。約1世紀後の1970年代になって、スリランカは織維製品、加工食品、通信機器など、輸出品目の多様化に成功し、紅茶の占める地位は相対的に低下した。しかし表1に示す通り、紅茶は今も最重要品目のひとつであることに変わりはない。

スリランカの独立に伴って、英國人によって経営されていた大規模プランテーションは国営化された。1972年と1975年の「土地改革」を通じて、英國人所有だった紅茶、ゴム、ココナツのエstate 500以上が2つの公社の経営下におかれた。

この結果、従来、スリランカ産紅茶の主要な輸入国であった英國は、プランテーション経営が可能なケニヤなどでの生産に転じたため、スリランカは英國市場を失った。以後、スリランカ

表 2 茶の 10 大輸出国

年	2000 年		2007 年	
順位	国名	輸出量 (トン)	国名	輸出量 (トン)
1	スリランカ	287,005	ケニヤ	374,329
2	中国	230,696	中国	292,199
3	ケニヤ	217,282	インド	193,459
4	インド	200,868	スリランカ	190,203
5	インドネシア	105,581	ベトナム	114,000
6	ベトナム	55,600	インドネシア	83,659
7	アルゼンチン	50,000	アルゼンチン	75,767
8	マラウイ	42,400	マラウイ	54,397
9	ウガンダ	26,388	ウガンダ	44,015
10	タンザニア	22,797	タンザニア	30,506

は紅茶の主要な輸出先を当時のソ連邦に求めた。

しかしながら、国営化された紅茶エstateは生産性の低下、品質管理の悪化という問題を抱えた。

そこで1992-3年に国営紅茶産業の経営を再度民間企業にリースするという形態での民営化に踏み切った。当初は5年のリースであったが、その後50年リースとし、外国資本の参入も認められるようになった。

他方で、同じ1990年代初

頭、ソ連邦の崩壊によってロシアへの紅茶輸出が減り、中東への輸出に転じた。しかし2000年以降、イラク戦争の影響を受けて中東への輸出も減り、2000年代にスリランカは茶葉輸出において、世界1の地位から転落し、インド、ケニヤ、中国に遅れを取るようになった（表2参照）。

なおスリランカでは紅茶生産の60%は南部の低地における小農民が生産する茶葉に移行しつつあり、特に中東向けには味が濃く、価格の安いこの南部産の紅茶が好まれるようになっている。2008-9年の世界経済危機の中で、欧米市場そして米国市場での価格悪化の影響を受けてスリランカ紅茶産業、なかでもエstateは経営悪化の一途をたどっている。労働集約的な生産方法や生産性の低さゆえに、エstate経営は困難を極め、エstate労働者の雇用もいっそう不安定化している。

② 茶園労働者の歴史

スリランカ紅茶園で茶摘みなどの労働に従事しているのは、英國植民地時代に茶園経営者たちが、茶園の労働力不足を補うために、インド南部から連れてきた貧農出身の人々である。コーヒー・プランテーションが盛んだった時代、コーヒーは収穫時期が年に1回と限られているので、季節労働者としてやってきた。プランテーションが紅茶生産に移行した結果、移住するようになったのである。このエstateのタミル人は、スリランカに紀元前から住むスリランカ・タミル人と区別して、

インド・タミル人と呼ばれている。言語はタミル語を話し、宗教も多くがヒンドゥ教徒であり、シンハラ人からはタミル人の一部とみなされながら、インドの低位カースト出身であり、言語も訛りがあるということで北東部のスリランカ・タミル人からも差別されている。

スリランカ独立後の1948年、49年に制定された市民権法はインド・タミル人に市民権を与えなかった。1964年にインド／スリランカ両政府の間で、インド・タミル人の一部はインド国籍を付与され、インドに帰還すること、他の一部はスリランカ国籍を与えられることが定められた

た¹が、どちらにも国籍を与えられなかつた人が10万人を超し、またスリランカ国籍を認められるはずであった人に対しても実際には適切な手続きが取られなかつた。1988年になってようやく国籍のないインド・タミル人に国籍を認める法案が議会で採択され、国連諸機関やNGOの助けを得て、1990年代にインド・タミル人は住民登録を行い、社会福祉サービスを受けられるようになった。すべての茶園で働くインド・タミル人に国籍が付与されたのは2003年になってからであつた。

英国人経営によるプランテーション経営の時代及び国営茶園の時代には、茶園労働者は、いわば「搖りかごから墓場まで」完全に外部から隔離されたエstateの中で過ごした。茶園内のラインハウス（長屋）とよばれる労働者用住宅に住み、子どもたちはエstate内の学校に通う。若い母親は、エstateの保育所に乳幼児を預けて、産後すぐから茶摘みの仕事に就く。ヒンドゥ寺院や簡単な診療所、墓地もエstate内にある。エstate内の学校を出ると、男性は、栽培、輸送、工場内の機材補修などの茶園の仕事につき、女性は茶摘みの仕事に従事する。こうして生涯の大半をエstateの外の世界と触れないで過ごしてきたのだった。

しかし21世紀になって、茶園労働者たちが、ようやく市民権を得て、移動の自由を初めとするより広い選択肢を得たとき、エstateは民営化の時代に入っていた。従つて、エstate労働者たちとその家族は、突然、グローバル化時代の荒波にさらされることになった。

表3 セクター別人口と平均所得・支出（2006年/2007年）

	人口		平均世帯 収入(月額)	平均世帯 支出 (月額)
	単位万人	比率	ルピー	ルピー
スリランカ全国	1,840	100%	26,286	22,952
都市人口	270	15%	41,928	35,274
農村人口	1,470	80%	24,039	21,440
エstate人口	100	5%	19,292	13,456

出所：Department of Census and Statistics - Sri Lanka

¹ シリマヴォ・シャストリ協定

③ バドウッラ県ハプタレ郡のエステート人口

スリランカの人口統計は、都市人口、農村人口、エステート人口に分類されている。エステート人口は全人口の 5 パーセント、100 万人 にのぼる。ほぼそのすべてがインド・タミル人である。エステート人口は、ヌワラエリヤ県（州人口の 53.6%）、バドウッラ県（同 20.7%）、ラトナプラ県（同 10.1%）などに集中している。表 7 と表 8 を参照すると明確なように、エステート人口の比率の高いヌワラエリヤ県、バドウッラ県、ラトナプラ県は同時に貧困比率でも上位を占めている。

バドウッラ県には合計 161,269 名 (20.7%) のエステート人口がいる一方、バドウッラ県の世帯のうち貧困世帯が占める比率²は 23.7% (2006/7 年調査) に上っている。

バドウッラ県の人口 779,983 名の約 7%、54,989 名がハプタレ郡に居住しており、そのうちのエステート人口は 16,238 名 (30%)、ハプタレ郡の貧困比率は 24.42% となっている。ハプタレ郡の貧困ライン以下の世帯人口は 11,241 人である。

b. グリーンフィールド茶園の状況

①□ グリーンフィールド茶園の概況

今回調査を行ったグリーンフィールド茶園は、紅茶の有名な産地のひとつであるウバ州バドウッラ県 (District Badulla) ハプタレ郡 (Sub District Haputale) トッタラガラ村 (DN Division Thotalagala) に位置するトッタラガラ・エステートの一部で、110 エーカーという比較的小規模な紅茶園=Tea Estate である（大規模な紅茶園は 2,000-3,000 エーカーを有している）。1931 年にイギリス人によって開園された歴史を有し、1975 年に国有化された後、1994 年に民営化された。1998 年に現在の Greenfield Bio Plantations (pvt) Ltd の所有になって以来、有機栽培に転換した。同社は周辺のさらに小規模な茶園主たちにも働きかけてハプタレ郡における有機農業を推進している。茶園内に紅茶加工工場を有し、周辺の有機栽培に転じた小規模紅茶生産農民約 100 人及び 2 つの小規模エステートの茶葉を買い取って加工している。

紅茶の有機栽培は、スリランカのエステートが世界に先駆けて開始したが、現在ではインド、中国の方が有機栽培紅茶を多く産出しており、政府による支援のない

表 4 当該地域のセクター別人口比率

	都市人口	農村人口	エステート人口
スリランカ全土	14.6%	80.0%	5.4%
バドウッラ県	6.6%	72.7%	20.7%
ハプタレ郡	6.4%	64.1%	30.0%

² Poverty Headcount Index=人口に占める貧困ライン以下の人の比率

スリランカでは、現在、わずか 7 つの茶園で実施されているにすぎない³。たとえばインドのダージリンでは 87 の茶園のうち 20 園が有機栽培に転換していることとくらべると非常に少ない。

スリランカの有機茶園の大半は、トッタラガラ茶園に近い、ハプタレ周辺に位置している。それはこの地方が岩石の露出が多く、急こう配の地形にあるため、生産効率を追求する生産方法にはそぐわないことが理由と考えられる。

しかし、スリランカの紅茶産業は、いずれの地域においても手摘みで、加工方法も伝統的な手法を守っており、コストがかかるので、欧米の有機食品市場あるいはフェアトレード市場などへ付加価値をつけて販売できるようになることが重要な課題である。

② グリーンフィールド茶園住民の状況

エステートの民営化以降、エステート住民とエステート労働者という 2 つの概念の乖離が始まっている。

表 5 グリーンフィールド茶園の労働人口の分布
(2009 年 6 月 30 日調査)

年齢	性別	人数	職業					
			茶園職員	臨時雇	失業者	学生	退職者	他の仕事
60 歳以上	男性	43	0	0	0	0	43	0
	女性	60	0	0	0	0	60	0
25 歳以上～ 60 歳未満	男性	178	49	0	55	0	14	60
	女性	184	89	1	57	0	17	20
20 歳以上～ 24 歳未満	男性	25	9	0	8	8	0	0
	女性	24	12	0	4	8	0	0
	男性	16	0	0	2	14	0	0
	女性	15	0	0	5	10	0	0
合計		545	159	1	131	40	134	80
比率 (%)		100%	29.2%	0.2%	24.0%	7.3%	24.6%	14.7%

グリーンフィールド茶園に居住する人口は 885 名である。他方で同茶園内住民のうちの労働人口 545 名のうち、グリーンフィールド茶園の加工工場及び茶畠の労働者として雇用されているのは 159 名（女性 101 名、男性 58 名）にすぎない。労働人口の 30% 弱である。他は公務員、

警察官などが少数いるが、失業者が 131 名、24% にのぼっている。

2009 年末に行った調査によるとグリーンフィールド茶園住民の世帯収入の平均は、21,287 ルピー（2009 年）であり、エステート人口の平均所得 19,292 ルピー（2006

³ 「スリランカ茶業の構造変化と有機農法導入の影響」、河本大地、地学雑誌 2008 年 6 月号

／7年）をやや上回っているものの、両統計の年代の違いを考慮すると、実態としてはほぼ平均と同様と考えられる。表6はその調査結果を要約したものである。

5,000 ルピー未満の所得の世帯が 14%を占めており、15,000 ルピー以下の所得の世帯が過半数である。

グリーンフィールド茶園住民の収入と近隣の同規模のエステート（Dambetanna）の住民の収入と比較した調査が同じ 2009 年末から 2010 年初めにかけて行われた⁴。その調査結果の一部が末尾の表 11 である。ダンベタナ茶園では、住民の 48% が 15,000–22,500 ルピーの所得を得ているのに対してグリーンフィールド茶園では 46% が 7,501–15,000 ルピーの所得層に属している（この比率は当団体による調査結果とほぼ等しい）。同調査及び当団体による調査でも、茶園が支払っている給与はグリーンフィールド茶園の方が高いことが明らかになっている。そして同調査結果は、

「グリーンフィールド茶園住民は副業による所得が少ない」ことを示している。有機紅茶栽培を行っているグリーンフィールド茶園においては茶畠の周囲では農薬や化学肥料を使えないで副業としての農業活動が活発でないことが、低所得の理由であるという。

同時に、グリーンフィールド茶園住民は、農作物を仲買人に販売しているが、野菜の生産量が少ないので、仲買人に対する交渉力はないうえに、仲買人は有機野菜に関する知識はなく野菜の見栄えで価格を決定するため、農薬を使わない、見栄えの劣る野菜は価格の上で不利になっている。

c. 茶園内の住民が抱える問題

グリーンフィールド茶園住民が抱える問題は、失業、低所得、住宅、職業選択のせまさ、教育問題など多岐にわたっている。しかも、こうした問題は根が深く、相互に関連しあっている。グリーンフィールド茶園住民が抱える問題の多くは、周辺の紅茶エステートにも共通する課題である。

① 乏しい雇用

グリーンフィールド茶園の住民、203 世帯（885 名）中 112 世帯だけが茶園か

表6 グリーンフィールド茶園住民の所得別

所得額(単位ルピー)	世帯数	比率
5,000 未満	18	14%
5,001 から 10,000 未満	33	26%
10,001 から 15,000 未満	14	11%
15,000 から 20,000 未満	12	10%
20,000 から 25,000 未満	12	10%
25,000 から 30,000 未満	8	6%
30,000 から 40,000 未満	8	6%
40,001 から 50,000 未満	2	2%
50,001 から 60,000 未満	11	9%
60,000 以上	8	6%
合計	126	100%

出所：当団体の調査に基づく

⁴ 龍谷大学大学院 Dammika Premarathna 氏による調査

らの収入を得ており、残りの 91 世帯のごく一部は警察官、行政官、教師などの職業についているが、大半は安定的な収入源を欠き、日雇いの建設労働などに従事しており、半失業状態あるいは非常に不安定な雇用状態である。しかも、エstate 内に居住している限り、茶園以外での恒常的な雇用を得ることは非常に難しい。

② 貧困

スリランカ政府は、バドゥッラ県における、最低限の栄養が摂取できる貧困ラインを 2010 年現在で、1 人当たり 3,170 ルピーとしている。これを世帯当たりの平均人数 4.4 人で計算すると 13,948 ルピーとなる。表 6 に示す通りグリーンフィールド茶園住民の半数以上は、これに及ばない所得水準である。

グリーンフィールド茶園に雇用されている人々の場合でも所得水準は低い。スリランカ政府とエstate 労働者の組合は 2009 年 9 月の労使交渉の結果、日当 405 ルピー⁵ の賃金水準について合意した。しかし最近では清掃日雇い労働でも日当 900 ルピーと言われており、この日当は清掃労働者の半分以下でしかない。茶摘みの女性の場合は、この日当の他に 1kg 摘むごとに 6 ルピーが加算される。しかし、紅茶の輸出量が多くなければ仕事はない、あるいは激しい雨の日には仕事がないので毎日働くとは限らず、税金その他を差し引かれた手取り月収は 12,000–13,000 ルピー前後といわれ、副収入がなければやはり貧困ラインぎりぎりで苦しい状態である。

しかも、グリーンフィールド住民の場合、副業としての野菜栽培による収入がないものも多い。野菜栽培を行っている場合も、無農薬栽培なので見栄えが悪い、仲買人を介して販売しているために安く買いたたかれるなどの理由から副収入が乏しい。

③ 住宅

グリーンフィールド住民 203 世帯のうち、171 世帯は、植民地時代からエstate に特有な約 10 世帯が軒を連ねる長屋(ラインハウス)に住んでいる。この長屋は老朽化し、雨漏りがして雨季には劣悪な生活状態となり、長屋 1 棟でひとつのみ便所しかない。しかしながら、住民すべてが茶園に雇用されているわけではなく、土地建物ともに住宅は政府の管轄にあるために、茶園側も改修を行えない。政府は National Housing Development Authority(NHDA) によるプログラムで、老朽化の激しい家屋に住む住民の家屋を新築する事業を行っているが、実際に行われているのは選挙の票田となる大規模エstate の住宅改善である。グリーンフ

⁵ 405 ルピーの内訳は、給与 285 ルピー、出勤手当 90 ルピー、業務実施報酬 30 ルピーとなっており、全額が基礎給与というわけではない。

イールドのような小規模茶園の住宅は 203 世帯中 25 軒しか新築されないといったように、ほぼ放置されている状態である。

④ 職業選択のせまさ

若い人々は、茶園の外の世界で仕事を見つけることを望んでいるが、言語、技能の点で就業チャンスは非常に限定されている。コロンボなどへの出稼ぎの場合、女性が多く、ほとんどがメイドの仕事に従事している。言語などの点から他の職業への就業は難しいうえに情報も限られている。また失業中の中高年男性も技術がないゆえに、茶園の外での就労機会は非常に限られている。住宅問題と合わせて職業選択の可能性がせまいことが、多くの社会問題をもたらしている。

⑤ 教育問題など

他の多くのエstateと同様、グリーンフィールド茶園でも上級学校への進学率は低く、グリーンフィールド茶園内の学校の児童およそ 350 名のなかで日本の高校に相当する A レベルまで進学できるのは 12 名に過ぎない。若者が将来に希望を見出せないこと、失業率が高いことが、エstate内の男性の飲酒、賭けごとなどの社会問題をもたらしている。

5. 今後の課題

茶園住民が安定的な収入を得られるような収入源を確保することが今後の課題である。特に、1) 紅茶以外の農作物を安定的に市場に供給できる仕組みを作り、安定した副収入を得られるようにすること、2) 有機栽培に取り組むグリーンフィールド茶園においては、茶園周辺地域の有機農業への取り組みを発展させ、付加価値のついた農作物を販売できるようになること、3) 失業者を対象とした技術訓練がなされ、職業選択の幅が広がること、が茶園労働者の収入向上のための解決策として挙げられる。西欧諸国や日本に比べ、スリランカ国内では、有機栽培に対する認知が低いが、高級レストランやスーパー・マーケットでは中産階級層や観光客を中心として需要が広がってきてている。その認知をさらに上げ、有機栽培に取り組む茶園で栽培された野菜を高価値で販売できるような市場を開拓することも望まれる。また、スリランカ紅茶園の現状を日本国内でも広く伝えてゆき、紅茶の消費を通じた支援を進めてゆくことも同様に重要である。